

創業者の思いを受け継ぎ デザイン力向上や環境保全に貢献



社会的な課題を自社の強みとする事業で解決し、企業の持続的な成長へとつなげる「CSV(Creating Shared Value)」活動が注目を集めています。折しも2015年9月に国連サミットでSDGs*（持続可能な開発目標）が採択され、今、内閣府や関係省庁もその実現に向けたキャンペーンを推進しています。今回は、SDGsの課題の一つである「陸の豊かさを守ろう」に貢献するコクヨ株式会社の黒田会長に、同社の企業理念や文化に対する思いを伺いました。

*Sustainable Development Goals：世界の持続可能な発展を実現するために、2016年から2030年までの15年間で、貧困や飢餓など国際社会が取り組む17の課題を定めたもの。

商品を通じて社会の役に立つ

当社は、1905年に創業者・黒田善太郎が大阪で和帳の表紙店を開いたことから始まりました。金銭出納帳などに使われる帳面表紙の厚い台紙をつくり、販売していたのです。それは薄い紙を何層も貼り付ける大変な手作業の仕事でした。開業して間もない頃、ある得意先から「今の君には、機械化する資金力もなければ、事業拡大のために出資してくれる友人もない。独立したといっても、カス(手間にかかる地味で薄利)の仕事しか残っていない」といわれたことがありました。これを聞いた善太郎は、「工夫してよい商品をつくれればお客さまに買っていただけるし、それを極めれば世の中になくはないモノをつくることできる。カスで結構」と奮起しました。

それから約半世紀後、私の父が新たに“封筒”づくりに

着手し、高価な製造機械を導入したことがありました。これに激怒したのが善太郎でした。「今ある商品を極めせず、新しいことに手をだすとは何事か。次のことを始めるなら、カスをカスでなくすぐらいまで極めてからや」と、大きなハンマーで機械をたたき壊したのです。善太郎はそれほど仕事には厳しく、モノづくりにこだわりがあったのです。

当社の事業活動の原点は、商品を通じて社会の役に立つことですが、その根底には、こうした創業者の思いがあります。例えば当社のキャンパスノートは1枚の紙の表裏の罫線がピタッと重なるようにコソコソと工夫を重ねて商品化され、すでに40年になります。おかげさまで今では年間1億冊を売り上げ、市場シェアは30%近くを占めるまでに成長しました。

緑を増やし心の安らぎを — 黒田緑化事業団

善太郎は、「事業は社会のために行うものであり、そこで得られる利益は貢献に対する報酬である」という言葉を遺しています。近年、とくに注力しているのが、環境分野とデザイン分野です。善太郎は折にふれて「見て美しいと感じる素直な心が商品の品質に通じ、木を育てることは人間づくりに通じる」と

説き、緑化に対して強い関心を持っていました。私の叔父で当社の常任監査役であった黒田敏之助も草木の緑が大好きで、緑化事業を行う財団の創設を願っていました。大阪はもとも緑が少なく、高度経済成長期の開発でさらに緑の少ない都市になりました。これを憂慮した敏之助が、心安らぐ生活環境を取り戻すことに貢献したいと願ったのです。残念ながら敏之助は若くして亡くなりましたが、当社は彼の遺志を継ぎ1973年に「財団法人黒田緑化事業団」を設立しました。以来毎年、大阪府内の公園、公道などでの植栽事業を行っています。御堂筋の銀杏並木の下に植えたリュウノヒゲや大阪城公園駅前の松並木もこうした活動実績の一つです。

森林資源の再生 — 結の森プロジェクト

2006年から高知県四万十町の民有林を「結(ゆい)の森」と名付け、間伐材の有効活用を中心とした森林保全を行ってきました。保全するためには、森林の密度を調節する間伐が必要になってくるのですが、間伐材を「結の森」ブランドとして商品化して、パソコンラックやペンスタンドにして販売しています。間伐材を再利用して商品にする。このような小さな輪が遠心力となって大きな輪が回りだす。我々の取り組みが新しい拡がりを生み出し、自然と共生する持続的社会的実現を後押しできればと考えています。

水環境の改善に貢献 — ReEDEN(リエデン)*プロジェクト

2007年からは、琵琶湖や淀川水系に群生する葦(よし)原を手入れすることで水質浄化に貢献する「琵琶湖リエデン・プロジェクト」を進めています。葦は葦簀(よしず：葦の茎を編んでつくった日除け)や屋根葦葺き材として利用されてきましたが、時代とともに活用の場を失い、葦原は放置状態になっていました。葦はCO₂を吸収し、水中の窒素やリンを吸い上げて水を浄化する働きがありますが、枯れてしまうとせっかく吸収したリンや窒素が溶け出し、水質を悪化させます。琵琶湖の自然環境を守るため、社員が葦を刈り、刈り取った葦を漉き込んだノートを商品にし、その売上の一部を葦原の保全活動に寄付しています。

*ReEDEN：Re(還す・帰る)、EDEN(エデン・楽園)、Reed(葦)。「葦で琵琶湖を楽園に戻そう」という願いを込めた、ココヨのブランド名。



葦刈りに参加した人たち(琵琶湖リエデン・プロジェクト)

写真提供：ココヨ株式会社

顧客起点のモノづくり — コクヨデザインアワード

私共の創業の原点は「工夫してよりよい商品をつくる」ことです。この「顧客起点のモノづくり」を目的として、2002年に文房具や家具、生活用品などのデザインコンペティション「コクヨデザインアワード」を創設し、今年で第15回を迎えることができました。一般から広く、環境志向やデザインなど時代のニーズを捉えたアイデアを募集し、それを商品化することで、デザイン力で社会に貢献しようというものです。ひいては日本のデザイン力の向上にも寄与できればと願っています。

毎年1200～1500点もの応募があります。今では若手プロダクトデザイナーの登竜门的な位置づけとして知られ、海外からも多数の応募をいただいています。一流デザイナーやアーティストに審査をお願いしており、審査にあたっては審査員同士が激論を交わし、私もそれに加わります。2次審査の応募者によるプレゼンテーションでは、審査員から「誰のためのデザインなのか」、「どういう使い方を想像しているのか」、「詰めが甘い」など厳しい指摘もあります。そのため受賞者からは、「審査員からさまざまな指摘を頂いたことが励みになった」という声も聞きます。このアワードをきっかけにデザイナーが卵の殻を破り、一歩前進する手助けになればと思っています。



コクヨデザインアワード2016授賞式にて



コクヨデザインアワードで商品化された消しゴム「カドケン」

「結の森商品」

黒田章裕氏

1949年生まれ、大阪市出身。72年ココヨ入社。常務取締役、専務取締役、副社長を経て、89年に代表取締役社長。2015年より現職。趣味はクラシック鑑賞。バロック時代以前の教会音楽を中心に4000枚のレコードを収集。ご子息の黒田卓也氏は、ニューヨーク在住の世界的ジャズトランペッターで、卓也氏のアメリカツアーに章裕氏が同行したこともある。

ココヨ株式会社

本社：大阪市東成区大今里南6丁目1番1号
1905年創業。文具、事務用品、オフィス家具などの製造・販売、空間デザイン、コンサルテーション、小売業への店舗什器の販売、生活雑貨の通販事業など。
従業員数：連結6,596名、単体1,999名(2016年12月末現在)、資本金158億円、売上高3,076億円(連結2016年1月1日～2016年12月31日)。